# 差別の砦を落す

## ——チャールズW.チェスナットの『大佐の夢』——

安部大成

## 1

チャールズ・ワッデル・チェスナットの3部作小説の最後の作品，『大佐の夢』(1905年)は，前2作品と扱うテーマは同じであるが，その側面が異なる。

前2作品が白人主要人物の内面的葛藤に力点が置かれ，この人物の差別観念と行為およびその克服過程が，外界の出来事に照応するかたちで描かれているが，『大佐の夢』では，人物の内面的葛藤，つまり個人における差別と反差別との心的抗争が扱われるのではなくて，諸個人間において，黒人の処遇をめぐって生ずる，差別と反差別との社会的葛藤，つまり外的抗争が，これらの人びとの社会階級，階層に眼を置いて描かれている。

この作品は前2作品と完く異なった特徴を一つ持っている点を指摘しておかねばなるまい。

『ヒマラヤ杉の蔭の家』ではレナ・ウォールデンとジョージ・トライオン，『伝統の精髄』ではジュリアとポーリィ，ジャネットとオリィヴィア，ミラーとカーターレットといったように，黒人と白人の人物間の社会および人間関係が作品の軸となっていて，これら白人人物の心的，外的行為に対し，黒人人物が行う独自の対応，批判，要求等が把握されており，白人人物の差別克

服には黒人人物の解放への意欲とヒューマニズム，社会的，人間的能力の発揮とが助力として必要であることが主張としてなされている。

だが，『大佐の夢』にはそれがない。黒人老人ピーターとフレンチの息子フィリップの友情，黒人女性ヴァイニィとその主人マルコム・ダドレィの情愛のエピソードは旧大農園生活の消え行く家父長的主従関係の枠内に生じた心の関係にすぎない。作品は二人の白人主要人物，人種差別主義者ビル・フェッターズとこれと対決するヘンリィ・フレンチ（フレンチ大佐）とを軸に展開される。黒人に対する権利の侵害と卑劣な行為，欺瞞と暴力，あらゆる悪事の具現者フェッターズに対決する黒人人物はこの作品には居ない。このフェッターズという人物は『伝統の精髄』のマクベーンの再来であって，その作品ではこの人物に対決する巨大な黒人，ジョシ・グリーンが存在する。グリーンはマクベーンを刺殺して銃弾に倒れる。『大佐の夢』においてフェッターズと戦う人物は白人のフレンチであって，ついで彼の側に立つ人びとであり，それはいずれも白人であって黒人ではない。これが『大佐の夢』が前2作品と異なるところの特徴である。

その原因の一つは容易に引き出せる。チェスナットは『伝統の精髄』を執筆していた時，この作品が，ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋』およびアルビオン・ターギーの『無駄な走り使い』の正真正銘の後継者として迎えられ，一般大衆の心に長く留まる作品となることを願ったし，それを期待し得る作品だと考えていた[1]。1901年10月，これがヒュートン・ミフリン社から出版されたとき，彼は娘のエセルにつぎの如く書いた。

「本は出版されたし，出だしもいい。南部人達はこの本を攻撃するだろう。最近の二，三の出来事はこの本の売れ行きを支えることになろうし，本も広く出廻ることになろう。」[2]

自作に対する強い自信に加えて，時代の流れは本の売れ行きを促す様相を呈しているとする観測は彼に多大の期待を持たせた。だが，『伝統の精髄』

は出版後2カ月を経ても初版の5千部をさばくことは出来なかった。『アンクル・トムの小屋』は2日間で初版5千部が売り切れ，その後10カ月間にアメリカで30万部，イギリスで15万部が売れた[3]のだったが。

1901年12月，出版社に宛てた彼の手紙は悲観に満ちている。

「私は世論は主要人物が黒人であるとか白人と比べて黒人の方に著しく同情を寄せて書いた本は，原則として好まないのではあるまいかと思うようになりました。」[4]

と彼は書いている。

『大佐の夢』に黒人の主要人物が存在せず，脇役の黒人ですら，差別と戦う姿勢を示すことさえない。彼は人種差別者および差別を維持する社会集団と対決する人物に白人を設定し，すぐれた白人は人種差別とかく戦うであろう，とリベラルな白人に強い期待をかけることにとどめたのである。彼は読者の反感を避けたのであった。しかし，南部諸州における制度化しつつあった黒人差別の現実を生々と描写し，これをアメリカ社会に突きつけることによって，現状の変革を求める鋭さには妥協も後退もなく，いわんや真実と事実とを避けようとする試みなど微塵もなかったことを忘れてはなるまい。

『大佐の夢』でチェスナットが取り上げた問題は当時南部諸州で行われていたところの，新しい奴隷制度と呼ばれた (1)「服役者貸し出し制度（コンヴィクト・リース・システム）」[5]と (2) 人種差別主義者による州政府の立法，行政部門の部分的掌握である。

これに対する解決の糸口をチェスナットは (1), (2) を包括しているところのカラー・ライン，即ち「人種の相違によって，人間を上下に分け隔てる境界線」は表面は強固に見えるが，その下はさほど固いものではないという事実に注目して[6]，これを突破口に，差別の砦を落そうと試みるのである。そして，それを成功させるには何が必要であるかを『大佐の夢』の破滅を通して提示したのであった。

この作品は20世紀に入る頃の，文中で推測し得るが，南カロライナ州の仮名の小地方都市，クラレンドンを舞台にしている。

主要人物のヘンリィ・フレンチはかつての南軍の大佐であったので，尊称としてフレンチ大佐とも呼ばれ，南北戦争後，北部に出て企業家として成功した人だが，息子フィリップの静養を兼ねて25年ぶりに故郷の町クラレンドンにもどって来る。彼は『伝統の精髄』のフィリップ・カーターレットの後日を感じさせる人物である。

大農園主であったフレンチ家も他の旧家も没落して，これに代って擡頭した新興ブルジョアジーが力を持っているが，その代表がビル・フェッターズであって，旧奴隷商，奴隷相場師，逃亡奴隷捕獲等を仕事とした階層の出である。

この二人の人物の間で，前掲の(1)，(2)を中心に，黒人の処遇をめぐって対立抗争がなされ，この作品に登場する白人の他の人物達はフレンチかフェッターズかのいずれかに与して間接的に対立する。問題なのはいずれの側の白人達の結束が強いかということであって，これが作品のテーマなのである。

フレンチは治安判事の役所の前を通りかかって裁判とも競りともつかない異様な出来事を目撃する。容疑者の有罪判決即貸し出しの光景を，少し長くなるが引用しよう。

「『つぎはバッド・ジョンソンに対する州の訴訟を行います。拘置者をここへ。』

治安官が手錠のかかった拘置者を引き立てて，判事のデスクの前に据えると，この男は身動きもせず，じっとそこに突っ立っていた。彼は，額がかなり広いが，さしてそれが低いともいえない，円い頭の，純血らしい小柄の頑丈そうな身体をした黒人であった。……

『バッド・ジョンソン』と判事は口を開いた。『お前は浮浪の科で科せられた罰金と訴訟費用の支払いに身柄を売られて働くことになっていた服

役労働を逃れた科で告発を受けている。答弁はどうだ――有罪か，無罪か？』

拘置者はむっとして押し黙っている。

『本官が無罪を申し立てよう。法廷記録によれば，お前は12月26日に浮浪の科で有罪となって罰金および訴訟費用支払いのために4カ月間，身柄をフェッターズさんのところへ売られたことになっている。4カ月を1週間で済ませることは出来まい。ターナーさんの証言を求めます。』

ターナーはバッドの逃亡とこれの追跡を，ハイネスはその逮捕を証言した。

『何か言うことは？』と判事は尋ねる。

『何を言ったって無駄よ』とこの黒人の男はつぶやく。『どうせ同じことさ。第一，俺は罰金刑を受けることは何もしてない。だから逃げたのさ。あの連中は俺をあそこに閉じ込めておく権利などありゃしないよ。』

『有罪だ，罰金20ドルと訴訟費用支払いを命ずる。お前は逮捕に向った治安官に抵抗した科で訴えられているのだ。有罪か，無罪か？　口を利かぬから本官が無罪を申し立てよう。ハイネスさん，証言してよろしい。』

ハイネスは拘置者が逮捕に抵抗し，弾をこめたピストルを突きつけられて，やっと縄についたことを証言した。拘置者は有罪判決を受け，この第二の罪で25ドルの罰金と訴訟費の支払い命令を受けた。

拘置所内で秩序を乱した行為に対する訴訟が手早く処理され，25ドルの罰金と訴訟費の支払いが科せられた。

……

『……さて，皆さん，この訴訟を整理してかたづけて置くことにしたい。合計75ドルの罰金と33ドル44セントの訴訟費になるが，拘置者バッド・ジョンソンの支払いを立て替えるのに何日の使用期間を申し出ますか？……この男は力が強く，健康で，これを扱える方には申し分のない仕事をしますよ。』

直ちに答える人はなかった。ターナーが歩み出て，拘置者を頭の上から足の先まで冷たくあざ笑うような顔つきで眺めるのだった。

『おい，バッド』と彼は言った。『俺達はもう一遍やってみなきゃなるまい。俺は未だ黒ん坊※に出し抜かれたことはない，またそうもさせんぞ。判事殿，18カ月で入札しますよ。このごくつぶしにはそれだけの値打ちしかありませんよ。』

競りの相手がなかったので，拘置者は18カ月間，フェッターズのところで働くべくターナーの方へ押しやられた。』[7]

服役者貸し出し制については注5）で述べたが，これに対する批判が強まって，合衆国憲法違反の判決が出るなかで，南部諸州では20世紀の初期から新たにチェン・ギャング制がこれに代り，実態にさほどの変化を見なかった。

さて，フェッターズとフレンチとの直接の対立はこのバッド・ジョンソンをめぐって生じ，やがてフレンチによる連邦政府への働きかけへと事が進むなかで，フレンチの息子の事故死とフェッターズの息子が狙撃される事件で，作品の流れは一転して，南部社会の根強い差別がフレンチとその支持者達を押しのけることになる。

服役者貸し出しの裁判の際，フレンチはかつての黒人従者，年老いたピーターを買い取る。この買い物は，彼の父が50年前に行った奴隷購入と大した違いはなかった，とチェスナットは言及している。貸し出し制そのものが廃止されなければ，黒人の権利は守れない，黒人の権利は白人の善意に依存するものではなく，法で保障されるべきものであることをチェスナットはジョンソンの身柄“譲渡”を求めるフレンチの行為とその限界を示すことによって明示する。

フレンチが治安判事の役所で昔の使用人を災いから救い出したことで，彼の帰郷が知れ，町の有力者が投宿先のホテルに訪ねて来る。この人物の言動から，彼等の黒人に対する考えが明らかにされる。

ホテルの表で，荷物を積んだ馬車馬が倒れており，脚が引き具に取られて立ち上れない。黒人が五，六人，馬をなだめ，引き具をはずそうとするがうまく行かぬ。これを十数人の白人が取り巻いて，あれこれ指示して大騒ぎになっている。この光景を指してジョン・マックリーンはフレンチに言う。

「『6人の黒ん坊が倍の数の白人の指し図を受けなきゃあ，馬一頭立たすことが出来ないんだ。南部が北部に遅れを取る原因はここにある。とにかく黒ん坊共が私達の時間とエネルギーの大半を奪い取るのだ。』」[8]

黒人馬車引きに他の黒人が協力しているのだが，これに対して白人が干渉する。だから作業がはかどらない。その事実に多くの白人は気づかない。白人優越感，あるいはその思想が彼等の思考をにぶくさせ，現実への対応を不正確にさせる。その結果生じる不利益の原因は，それは欲求不満の吐け口の役割をも果すのだが，黒人に帰着される。

人種優越思想，人種差別思想は人種抑圧のために考え出された政治思想である。従ってこのマックリーンの黒人非難はその調子を強めるうちに，差別の本質を露呈する。

「新しい選挙権修正条項が通過すれば……黒人は政治から閉め出される，だから南部人は“黒ん坊支配”の恐怖から解き放たれて，よりすぐれた問題に関心を向けることが出来，この地方も進歩の道を突き進むことになろう。」[9]

黒人から政治的権利を奪い取って，基本的人権をも蹂躙する，即ち黒人を白人支配下に隷属させ，搾取する，それによって南部に経済的繁栄をもたらそうとする意図が存在する。

その価値判断は別として，人力に依存する生産そのものが時代遅れであることに人びとの多くが気づかないでいる。

かつて栄え，やがて産業資本主義の波にのまれて亡んだ奴隷制経済の夢を追う人びとも多数存在する。服役者貸し出し制はその典型であった。

マックリーンはつぎの郡選挙で検屍官の地位を得ようとしており，それに

は州議員でもあるフェッターズの力添えを必要とする。

この地方の有力紙『アングロ・サクソン』の編集長ヘンリィ・クレイ・アプルトンは州議員でつぎの合衆国選挙ではクラレンドン地区から国会への席を狙っている。彼はフェッターズの強力な支持者である。

彼等はこの地方の経済的停滞の原因を「南北戦争，再建期に南部に来た北部人，憲法修正第14条項および黒人」[10]に帰着し，黒人の抑圧，搾取を正当化することで利益をむさぼり，反黒人感情を政治的に利用して州政府，あるいは連邦政府の地方部署を占め収入源にしている。

フレンチはフェッターズが経営している数ある服役者労働大農場の一つにのちほど足を踏み入れ，フェッターズと対決することになるが，その前にこの人物が白人子女を紡績工場で長時間，低賃金で労働させる現場を目撃する。そして，フェッターズの行為を支持するアプルトンの釈明はいつわりに満ちていることが明らかになる。アプルトンはこう言ったのである。

「『この州は貧しい。白人の子供達は教育を受けられずに困っているのに，黒人学校に多大の金を使わなければならない。この服役者契約労働は州のかなりの財源になっている……』」[11]

州が貧しいことは事実である。州が黒人を不当に逮捕して，貸し出しを行い，かなり財源を作っているのも事実である。しかし，それは黒人学校の費用に廻ってはいない。

白人の子供の多くが教育を受けられないのは黒人の方に州の財源が使われるからではなく，フェッターズを典型とする南部新興ブルジョアジーによって，白人労働者が，農業労働者が搾取されているからである。

チェスナットは人種差別の仕組を描き出しつつ，この現実に直面した人は如何にこれに対応すべきかを作品で問うのである。

※　nigger　黒人に対する差別語である。黒人女性作家アン・ペトリはその短編小説「ドアを叩くべきだった」（1947年）で白人女教員ギブ・テイラーにこの言葉を浴びせられた若い黒人女教員アリス・ナイトの心境とこの言葉，人を「人間以外の動物，

社会からのけものにされた者，何か嫌悪の情を起させる，うようよと這いまわるもの」[a]と規定するところのこの言葉が及ぼす人間否定の特質を描いている。

また黒人作家クレアレンス・メイジャーが編集した『黒人俗言　アフロ－アメリカ人用語辞典』は，nigger は

「（恐らくフランス語の negre から出たものであろうが）黒人を呼ぶのに白人が使うときはだいたい侮辱と軽蔑を意味するが，黒人間で使われるときには，この言葉は皮肉とは別に，黒人歴史を意識した悲喜劇感覚を反映した，ぬくもりと善意を基調にした民族用語。」[b]

と定義している。

a）Ann Petry, The Necessary Knocking at the Door, in L. M. Schulman ed., *Come Out the Wilderness* (Popular Library, 1965), p. 123.

b）Clarence Major ed., *Black Slang, A Dictionary of Afro-American Talk* (Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 85.

〔注〕

1）Frances Richardson Keller, *An American Crusade*, The Life of Charles Waddell Chesnutt (Brigham Young University Press, 1978), p. 192.

2）Helen M. Chesnutt, *Charles Waddell Chesnutt*, Pioneer of the Color Line (The University of North Carolina Press, 1952), p. 175.

3）Russel B. Nye, Introduction, Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin* (Washington Square Press, 1963), p. x.

4）Helen M. Chesnutt, *op. cit.*, p. 178.

5）Convict lease system　これは南部再建期に盛んになった制度で，

「悪名高い服役者貸し出し制度……のもとで……州および郡は民間の請負業者に対して，鉱山，テレピン油採集場，堤防工事，建築作業，大農場などで使うために，服役者を貸し出した。請負業者は黒人の貸し出しを好み，その結果，新しい奴隷制度が生み出され，そのもとで，物件に関する軽い刑法を犯した程度の黒人が戦前の奴隷制度よりも冷酷な強制労働をしばしば強いられることになった。」[a]

「民間の関係者が服役者の労働を刑務所側と一人につきいくらで売買契約を結ぶ制度であって……服役者の住居，食物，衣服，監視，その他の世話を民間の関係者が引き受け，刑務所の財政負担をなくするものである。この制度のもとで，すさまじいほどの虐待，酷使がなされた。現在は合衆国のどの州でも廃止されている。」[b]

「19 世紀の終り頃，南部諸州で広く利用されたが，服役者貸し出し制度は 1908 年ジョージア州で廃止された。しかし，残念なことに，この制度に代った郡チェン・ギャング制度は前の制度と殆ど変りがない。」[c]

a）Robert Cruden, *The Negro Reconstruction* (Prentice-Hall, 1969), p. 100.

b) *Dictionary of Sociology and Related Sciences* (Littlefield, Adams & Co., 1961), p. 68.

c) Ray Stannard Baker, Foot Note 2, *Following the Color Line* (Harper Torchbooks, 1964), p. 50.

6) Charles W. Chesnutt, *The Colonel's Dream* (Mnemosyne Publishing, Co., Inc., 1969), p. 262.

「クラレンドン市のカラー・ラインはすべての南部の町がそうである如く，少くとも表面は，ゆりかごから墓地に到るまで厳密に引かれていた。」ここでチェスナットが「少くとも表面は」と述べているところが重要である。それについては本文で扱う。

7) *Ibid*., pp. 63, 64, 65.

8) *Ibid*., p. 72.

9) *Ibid*., p. 73.

10) *Ibid*., p. 108.

11) *Ibid*., p. 76.

## 2

チェスナットはフレンチという人物をつぎのように性格づける。

「如何なることも安易に引き受けることはないが，一度手がけたものは間違いなく，徹底して行う……そして高潔な内的衝動には直ちに応じ，不正に対して義憤を覚え得る安定した性格の人であって，持つには良き友であり，敵にするには危険な人であって，知性よりも心情に動かされて誤ることもある，地に味を与えるところの，地の塩と言える人である。」[1)]

チェスナットはこの種の人物は現実の社会に間違いなく存在しており，これらの人物が黒人差別に直面すれば，フレンチの如く行動するであろうし，その行為は差別に与しないでいようとする潜在的反差別の勢力を立ち上らせる転機となることを作品によって訴え，白人の側から，人種差別と闘う人びとが多く出て来ることを求めたのである。

フレンチはこの地方の経済的停滞を破る手がかりを作り，さらに公平な雇用によって，フェッターズの行う，不当な工場経営に打撃を与えるべく，こ

の地に紡績工場を設置することになる。

息子の一時休養の地として選んだクラレンドン市が長期滞在の地となる。

紡績工場建設用のレンガは地元の休業中のレンガ工場を再開してまかなわれることになり，失職中の白人，黒人の作業員，職工達が集められる。

この工場の主任にジョン・マックリーンを起用しようとするが彼は拒絶する。工場には白人だけでなく黒人が雇われている。しかも平等な条件においてである。彼は白人と黒人とが共同作業する工場の主任にはなりたくないのである。

ジム・グリーンという白人の親方が主任を引き受けて，レンガ製造と紡績工場の基礎工事が開始される。

マクリーンは白人と黒人との共同作業はもとより同一賃金を認めない。しかし，グリーンはそれを認める故に主任を引き受けたのである。

グリーンはフレンチと職務上意見を異にして，途中で主任の地位を捨てる。フレンチが黒人のジョージ・ブラウンを主任に起用すると二人の白人レンガ職人が仕事をやめる。

彼等は言う。

「『私達はジョージ・ブラウンの下ではどうあっても働けません。黒人と一緒に働くのは構いませんが，その下では働けません。』」[2)]（下線部，原文はイタリック体）

彼等は白人優越意識によって黒人の下では働けない。それは単なる個人の観念の領域にある制約ではなく，黒人の下で働いているのをみられたくない，という差別社会の眼を意識したものであって，いわば社会通念に左右されていると言える。だが，黒人と平等に共同作業をするというところへ進み出ている点を評価すべきである。ついでに言えば，白人，黒人の平等な混成作業集団の主任たることを拒絶したマックリーンとこれを直ちに引き受けたグリーンとの間には格段の相違がある。二人はフェッターズ一派に属するのだが，二人の間には間違いなく亀裂が存在している。

フレンチが再び買いもどした旧邸へ招かれた市の上層部に属する人びとの間でも，同じことが言える。

プレズビテリアン派の牧師マッケンジー博士は黒人退化論者である。黒人は奴隷制から解き放たれて以来，著しく退化している。これは黒色人種の本来の姿であり，神の意志である。黒人を放置しておけば自然に消滅して行く，と言うのである。

彼は黒人に対する差別の強化を見ようとしない。黒人の権利を守らんとする奮闘とこれに対する白人の支持を破滅させようとするのが，この黒人退化論の背景である。

「『彼等は落胆するような環境のもとで，どうにかこうにか進歩をなしとげて来た……』」[3]

例えば，奴隷であったニコラスは家を5軒所有するまでになっているし，テイラーは黒人学校の教員となって活躍している。黒人退化論など完く問題にならぬと言うフレンチに，プライス博士は同調する。

ソーロントンは黒人と白人の政治的平等を正しいものと信じている。しかし，正直に言えば社会的平等には耐え難いと述懐する。彼は旧奴隷制時代に育った世代なのである。若し彼が南北戦争後に育ったら，政治的平等から進んで社会的平等を自明の理と信ずるところへ歩み出ることが考えられる。フェッターズの顧問弁護士，元判事のバラードと対比される，フレンチの顧問弁護士，若い世代のアルバート・カクストンの如き人物たり得ただろう。

プライス博士とソーロントンとをマッケンジー博士と同一に扱うべきではない。マッケンジー博士はバラード元判事と共にフェッターズに与するであろうが，プライス博士とソーロントンはそうはしないであろう。白人全体が一枚岩となって，黒人を差別しているのではないこと，また強固に見える差別の砦にもすき間はいくつも開いていることをチェスナットは指摘し，差別と闘う人びとの結束を期待するのである。

フレンチが紡績工場の建設に乗り出し，さらに黒人学校の設備をととのえ

ようとする試みについて，訪問客が所見を述べるとき，彼は言う。

「『我々の祖先が彼等をこの地につれて来て，彼等の労働に依存して……ぜいたくな暮しをしたのだ。300年の苦役の後，彼等は自由を得たのだと言えよう。……我々が彼等に我々の言葉を……宗教を，そして法律で不名誉の烙印を押しているのだが，我々の血を与えたのだ。恐らく我々の側で多大の犠牲を払うことなしには彼等を正当に扱ったことにはならないと思う。』」[4]

人種差別の問題は単なる社会問題ではなくて，白人の道義的責任の問題であり，これは賠償をともなうことをチェスナットは指摘するのである。

さて，身に覚えのない罪で有罪判決を受け，フェッターズに身柄を貸し出されたバッド・ジョンソンは再度脱走して捕えられ，労働収容所で虐待され，生命が危ぶまれている。

フレンチとフェッターズの対立が表面化するのはこのジョンソンをめぐってである。

ジョンソンの身柄を多額の資金を渡して引き取ろうというフレンチの要求にフェッターズは応じない。

レンガ工場を再操業し，白人と黒人とを平等な条件で雇用し，南部の秩序を破っただけではなく，賃金面で労働市場を混乱させ，フェッターズの雇用関係に打撃を与えたフレンチの要求には応じないのである。フレンチは紡績工場を建設中でもある。これは間違いなくフェッターズの紡績工場の強敵となる。

彼がフレンチの要求に応じないもう一つの理由はジョンソンが行うところの白人に対する抵抗にある。

「『俺は如何なる黒奴（ネガ）にも俺を出し抜くことは許さないし，また白人を出し抜くこともさせぬ』」[5]

と彼は重々しくつけ加えるのであった。

彼は冷酷で頑迷な人種差別主義者なのである。この種の人物と個人レベル

での要求や抗争は役立たない。フレンチは明らかに労働に関する連邦法に違反している服役者貸し出し制に対して連邦政府の調査を求める手続を取る。これにはカックストン弁護士が活躍し，プライス博士，ソーロントンの外，市の有力者も加わることになり，クラレンドン市はフェッターズ派とフレンチ派に大きく別れて人種問題，服役者貸し出し制をめぐって対立することになる。

連邦政府の介入を恐れるフェッターズは弁護士バラードを通して妥協して来る。連邦政府に対する調査要求を撤回すればジョンソンの身柄を引き渡すと言うのである。フレンチはこれを拒絶する。フェッターズに対する戦いが開始されたのである。カックストンは人を使ってうまくジョンソンを脱走させる。

治安判事の役所で行われた判決と競りの現場でフレンチに助け出されたピーターはフレンチの息子フィリップの忠実な付き添いとなり，二人の間に深い友情が成り立つ。しかし，ここには旧大農園生活の主従関係の香りがする。これを破る出来事は二人の事故死の後に生ずる。

フィリップは貨物車にはねられ，これを防がんとしたピーターと共に他界する。病弱であったフィリップは死の訪れに敏感だったのであろう，二人の墓はお互いに寄り添うように並べてくれるようフレンチに依頼してあった。

南部諸州における墓地の人種隔離についてチェスナットはその名作「花束」(1899年）で取り上げ，一匹の犬の助けを借りて，世話になった白人の先生の墓に花を献じた黒人少女のけなげな姿を描いて，死後にも続く人種差別を批判しているが，南部諸州における人種差別はゆりかごから墓場まで貫徹しているのであった。

フレンチは生前の息子との約束を守って，フレンチ家の墓地にフィリップとピーターとを並べ葬ることにする。

黒人を白人墓地に埋葬するという情報が葬儀屋からもらされ，これが市民の間に広がり，激しい抗議がクラレンドン市長のところへ殺到する。脅迫め

いたものもある。そこで彼が議長をつとめるところのオーク霊園管理委員会を招集する。

チェスナットは言う。

「クラレンドン市のカラー・ラインはすべての南部の町がそうである如く，少くとも表面は，ゆりかごから墓地に到るまで厳密に引かれていた。黒人の屍が神聖なオーク霊園を汚がしたことはかつてなかった。」[6]

彼が「少くとも表面は」と述べている点に注目したい。表面に出ないところで，人種を上下に分け隔てる境界線は，かなりの分野において消滅しているのである。そこでは人間は生れながらにして平等であることが理屈や思想抜きで実現している。外見は堅固である差別の壁の内部に，人間の平等を信じて疑わない人びとの行為がひびを入れ，これを崩す働きをして来た。チェスナットはそこに注目し，暗たんたる差別の時代に，差別のない日の到来のきざしをそこに見ていたのである。

市長が委員会で，ピーターの遺体を白人墓地に埋めることは南部社会の原理に反するとして強く反対すると，ソーロントンは言う。

「『市長の規則についての意見は正しい……』……『……しかし，あらゆる規則には例外がある。』」[7]

そして彼は奴隷制時代，チャールストン市で聖マイケル教会の尖塔をよじ登って，この由緒ある建物を火災から守った一奴隷を，規則を曲げて市が自由の身にした例をあげる。

ダーデンではソーロントンの発言に誘われるかのように別の例を出す。

白人と黒人が同一の教会で席を占めるとき，前者は一階，後者は二階と人種は隔離されて同一の神を礼拝する。マックレア家の黒人召使サリーが老衰して耳が遠くなり，また階段を登ることが出来なくなったとき，一階の前列に坐らせたことがあった。今回の件も例外扱いにしたらいいと彼は主張する。

市長が反論するには，それらの例外は奴隷制という枠組があってのことで

あり，今日のように黒人抑圧の制度化が不充分な時に，例外をもうけると，それは白人と黒人との社会的平等の先例になってしまう，というのである。これに対して他の委員は，墓地での社会的平等など大した影響は生じないと市長の心配をぬぐい去るかたちでフレンチの側に立つ。

これら霊園管理委員達の市長への反論には限界があろう。しかし，差別の砦の内部で差別の崩壊が始まるきざしがここに生じていることを見逃してはならない。

委員達に押し切られて市長は事を成り行きにまかすことになる。

フィリップと共にピーターの遺体はオーク霊園のフレンチ家の墓地に埋葬されるが，これを敵意を持ってみつめる白人の一団がある。

「『フレンチ大佐は民族の敵だ』……『奴は白人に仕事がないときに黒ん坊を雇い，白人がやっと暮しを立てているときに黒ん坊に白人以上の賃金を与えている。その上白人のところに黒人を埋めてやがる。』」[8]

とその一人が憎悪をみなぎらせてフレンチを非難する。

市がフレンチとフェッターズに二分され，対立が深まるなかで，ショッキングな事件が発生する。

フェッターズの一人息子バークレイが何者かに待ち伏せされ，散弾銃で顔面を射たれ，片方の眼を失う。その後，フェッターズの部下，服役者労働収容所の現場監督ハーネスが射たれて片腕を失う。容疑はバークレイと舞踏会で乱闘した，フレンチの若い友人ベン・ダッドレイにかかるが，犯人はハーネスに虐待されたバッド・ジョンソンであることが判明する。

この最初の事件は，フレンチの息子フィリップが事故死する直前の事であった。フレンチに敵意を持つ人種差別者フェッターズは彼が不法に入手した他人の財産を取りもどすため，フレンチが送った弁護士カックストンに言う。

「『……奴の息子が今日死んだと聞いたよ。これは奴に下った天罰だと，俺が言っていたと伝えておきな，俺の息子の身体が損われたのは奴に責任

があると考えているんだから。奴はこの地へやって来て労働市場を混乱させようとしたんだ。間違った考えを黒ん坊共の頭に吹き込みもした。その上俺が買った黒ん坊を奪い取るつもりで俺の事業に介入した。……そいつを手離してやると申し出てもそうさせなかった……こいつを脱走させて……俺の息子と俺の現場監督を射たせやがったのだ。……今日奴の上に天罰が下ったが，それが最後じゃない……と俺が言ってたと伝えておけ。』」[9]

彼は黒人を抑圧，搾取し，差別し，虐待して来た。そして，彼に同調し，積極的に力添えして来た息子と部下が危く生命を落すところであった。彼は愛する息子に一度は迫った死を，ジョンソンや他の服役労働者の身に迫る死と同一視することもなく，自らの不正に対する反省の契機ともしない。

チェスナットは『伝統の精髄』において，愛と死を，人間が平等であることを認識させる契機となるところの偉大な力として描いたが，彼はそこに，頑迷な差別主義者マクベーンを登場させて，つぎの如く述べた。

「小説においては，そのような人物も時には心を改めることもある。現実の人生においては彼等のような人物は，大抵死んで土に変るまで，その本性を変えることはない。」[10]

フェッターズ父子も死んで土に変るまで，その本性を変えないのかも知れぬ。マクベーンは黒人の武闘派ジョシ・グリーンに刺殺されたのだった。

「バークレイ・フェッターズは一方の眼が使えるようになると，容貌が醜くなった恨みで，黒人全体に敵意をいだくようになり，社会に出るとその才能と受けた教育を傾倒して，黒人の地位低下に身を投じたのである。」[11]

フェッターズ一派は黒人虐待と差別の強化をもってフレンチに対する攻撃を開始する。裁判を待つバッド・ジョンソンを拘置所から引きずり出し，これには保安官が協力しているが，リンチ殺害する。服役者労働収容所の黒人が徹底的に痛めつけられる。そして，オーク霊園のフレンチ家の墓地に，フィリップと並んで永眠するピーターの遺体が掘り出され，その柩が深夜，フ

レンチ邸のポーチに置き去りにされる。

フェッターズ一派は南部社会の底流に，未だ息をひき取らずに，どす黒く横たわる人種差別の力を引きずり出し，フレンチを孤立させる。

フレンチはトレドウェル家の親しいルナ嬢に言う。

「『ルナ，立派な人びとというものはだね』と彼はつかれた微笑を浮べて言うのだった。『一種の抽象的な存在なのだよ。何か悪が行われているとき，彼等はそれを阻止しにそこへ出て行こうとはしない。悪が身近に迫って来ると彼等は霜のように消えてしまうのだ。悪がなされてしまうと，彼等は弁解してそれを黙認し，完くこれを罰しようとはしない。……』」[12]

黒人学校の教員である黒人のヘンリィ・テイラーも言う。

「『正義が実現することを求める善良な白人が居ることは分っています——でも彼等は事を運ぶほどの力がない……』」[13]

フレンチと共に踏みとどまって戦えるのはカックストン一人である。フレンチの側に居た白人達はフェッターズ一派の血をともなう反撃の前に「霜のように消えてしまう」のであった。

フレンチはクラレンドン市を立ち去ることになる。大佐の夢は破れたのだ。しかし，彼がまいた正義の種子は南部の地にその身を死なせて芽を吹くのだと，チェスナットは強い望みを持って書く。

「フェッターズとその種の人物が未だその地域を押さえているが，他の人びとが大佐の終えた戦いを引き継いでいる。……あちこちで勇敢な判事が不名誉なチェン・ギャング制と服役者貸し出し制に有罪の判決をくだしている。」[14]

彼は20世紀に入って一段と悪化して行く南部諸州の人種差別に対して，彼の最後となった長編小説『大佐の夢』をつぎのように結んだのだった。

「白人は白人の道を行き，黒人は黒人の道を行き，道は大きく離れて行って，その結果どうなるのか誰も知らない。しかし，こうした状態が過ぎ去って，いつの日にか我が国が本当に自由になり，強者はよろこんで弱者の

重荷を背負い，自由の種子たる正義と自由の花たる平和が我が国の隅々にみなぎることを願い，祈る人びとが存在している。」[15]

彼は差別に加担しないでいようとする多くの人びとの存在を認めている。そして，この人びとが，自由の種子たる正義を胸に眠らせることなく，立ち上り，結束して差別と対決して行くことを強く求めたのであった。

〔注〕

1） Charles Waddell Chesnutt, *The Colonel's Dream*, p. 3.
2） *Ibid*., p. 191.
3） *Ibid*., p. 165.
4） *Ibid*., p. 165.
5） *Ibid*., p. 224.
6） *Ibid*., p. 262.
7） *Ibid*., pp. 264, 265.
8） *Ibid*., p. 271.
9） *Ibid*., pp. 268, 269.
10） Charles W. Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (Arnos & The New York Times, 1969), p. 304.
11） Charles W. Chesnutt, *op. cit*., pp. 290, 291.
12） *Ibid*., p. 283.
13） *Ibid*., p. 244.
14） *Ibid*., p. 293.
15） *Ibid*., p. 294.

## 3

チェスナットの3部作小説に登場する開明的な白人男女はすべて，かつての奴隷所有階級のなかの大農園主クラスに所属する人びとである。この人びとの周辺に，旧い家系を持つ医者，弁護士，判事等，社会的に上位の地位を占める人びとが存在する。

そして，頑迷な差別者として，旧奴隷制度下の，奴隷監督あるいは逃亡奴

隷を捕える仕事にたずさわった人びとの系列にある者が設定される。『伝統の精髄』のマクベーン，『大佐の夢』のフェッターズがそれであり，開明的な人物，『ヒマラヤ杉』の判事ストレイト，ジョージ・トライオン，『伝統の精髄』のカーターレット夫妻，サミュエル・マーケル，デラメア，この作品のフレンチ，トレッドウェル，プライス博士，カックストン弁護士，ソーロントン，そしてダッドレイ，いずれも大農園主階級の系列に属する人物である。

彼の処女作「アンクル・ピーターの家」が紙上に出た1885年から，作品集『魔法使いの女』，『若き日の妻』が出版された1899年，そして3部作小説が出される1905年までを念頭に置けば，黒人の諸権利を守る上で，社会的・政治的な力として期待し得る南部白人は旧大農園主階級の新しい世代以外に見い出し得なかったのではあるまいか。

1903年W. E. B. デュ・ボイスは『黒人の魂』でつぎの如く述べている。

「南部は“堅固”ではない。それは社会変化の動揺の中にある土地である……識別力のある，心の広い批判を南部は必要としている……

今日南部白人の黒人に対する態度でさえ，多くの人びとが推測するように，あらゆる面で同じではない。知識に欠ける南部人は黒人を憎み，働く者は黒人との競争を恐れ，金もうけのうまい者達は黒人を労働者として使いたがっているし，教育を受けた者の幾分かは黒人の向上発展を脅威と見なすが，一方ある者は――普通それはかつての奴隷制農園所有主の息子達であるが――黒人が向上するのを手助けしようと願っている。この一番あとの階層が全国的な世論に支えられて黒人普通校を維持せしめ，黒人を財産，生命，および活動の面で，部分的にではあるが，これを守る役目をしている。」[1)]

20世紀に入ってその15年の間に，南部諸州ではつぎつぎに黒人の選挙権が奪い取られ，市民権は踏みにじられていくが，こうした暗たんたる状況の下にあって，チェスナットもデュ・ボイスと同じく，黒人の側に立つ数少い

協力者として，当時の旧大農園主のうちの新しい世代の一部に，強く期待をかけたのであろう。それほどこの時期は黒人にとって暗黒時代であったのだ。

彼等には黒人中間階級が力を持ち，黒人大衆と提携する日は未だ訪れていなかったのである。（完）

〔注〕

1) W. E. Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folk* (Fawcett Premier Book, 1961), p. 52.